まこと会便り

2018/11

みなさまいかがお過ごしでしょうか。

「月を差す指」というお話しを聴かれたことがあるでしょうか。仏法を月に説法を指に喩えて、説法は月（仏法）を指し示してはいるが仏法そのものではない。指にばかり注目するのではなく、指が指し示す先の月を見なくては意味がない・・・というお話しです。

月（仏法）と私の距離を物語るようで、私はこのお話が大好きです。月を見ているとコツコツ積み重ねて高くしていけばいつか届くことが出来るのではないかと思えます。しかし、月と私の居る地球の間には宇宙空間があって、重力も質量も私たちの地球の常識が全く通じないウルトラC的な空間を超えないと月にはたどり着けません。見えているから繋がっているとは限らないのです。お聴聞するとき私たちはまずは知識として積み重ねていって理解しようとします。しかし、勉強のように知識をいくら積み重ねてもそのまま仏法が分かるようになる訳ではなさそうです。

ご講師の先生方は仏法を指し示してくださっています。その指先ではなく、指し示す先に私の目が向かうようお聴聞したいことです。

行事予定

十一月十六日（金）　ヨガの会

一時半より　光圓寺　本堂

十二月　五日（水）　ヨガの会

十二月二十一日（金）ヨガの会

平成三十一年

一月十五日（火）　御正忌法要

午後一時半より　光圓寺本堂

講師　住職

御正忌法要・新年会のご案内は年明けに発送致します。みなさまお参りください。

報恩講　ありがとうございました

去る十月二十五日に光圓寺報恩講が勤まりました。今年は自然災害の多い一年でしたから、またみなさんと一緒にお齋（とき）の膳につくことができて有り難く感じました。また、はじめてお膳に付いたという方もおられました。うれしいことです。これからも初めての方が増えていただけるとうれしいです。

今年のお齋（とき）は、南観音東地区の方々がご接待くださいました。ありがとうございました。

ご接待いただきました皆さまと坊守

【報恩講・秋季永代経法要　坊守覚え書き】

＊報恩講と永代経法要

報恩講式という形式を作られたのは本願寺第三代門主の覚如上人です。当時関東には聖人から直接教えをいただかれた門弟がまだ存命でおられた時代でしたから、覚如上人はこれらの門弟を訪ねて歩かれました。直接お会いして聖人の足跡のお話を聞き、聖人の書かれた文章やお手紙などを集めて回られたのです。それらを整理して創られたのがご伝抄やご絵伝であり、報恩講式です。後の世の一人でも多くの人々がこの教えに遇いお念仏のご縁に遇うように、文字や絵にして残してくださいました。そのご恩やお徳をしのび、この教えがこれからも続いていくようにとの思いを込めてお勤めしましょう。

＊臨終の善し悪しを問わず

親鸞聖人は関東からの門弟の手紙の返信の中で、阿弥陀如来さまのお救いには臨終の善悪は問題にならないと説かれました。人はいつどのような死を遂げるのかは誰にも分かりません。もしも、臨終の様子によってお救いに違いがあるとするならば、私たちは死ぬその瞬間まで気を抜くことのできない時間を生きていくことになります。

阿弥陀さまはそれこれの条件をつけることなく全てをお救いくださいます。条件をつけたがるのは私たち人間なのです。

私たちは自分の思う範囲で物事を決めてかかります。そして私たちの思いの中には、多い・少ない・深い・浅い等といった大きさが必ず入ってきます。お念仏申すことも、私の意志で申すのであれば私の思いが関わってきます。信心も私が信じるのであれば、私の思いが関わってきます。私の信心と他の人の信心に違いが生まれたり差が出てくるのです。信心もお念仏も、私のものであるかのように思えますが、それらはすべて仏さまから届けられたいただきものなのです。

私が信心するのではなく

ご信心を（如来さまから）いただくのです

仏さまからいただいたものだからこそ、私のお念仏も他の誰かのお念仏も変わらず同じものであり、仏さまのお救いも等しく、同じようにお救い頂けるのです。

＊信心は仏心なり・・・仏心だから決定〈けつじょう〉している

私たちは当たり前のように予定をたてます。明日の予定、来月の予定、来年の予定。しかし、私たちが当たり前のようにあると信じている未来は必ずあるとは限りません。誰にも証明できない、真実とは違うものなのです。事故や自然災害などで全く思いもしなかったような明日がやってくることだってあります。

私たちが信じているのは私たちが決めた予定なのです。私たちが決めたことを私たちが信じていて、予定通りにいくと思っているだけなのです。予定通りにいかないから、そこに悩みが生じてくるのです。

私たちの予定は未定です

如来の本願は決定（けつじょう）です